

【表現学関連分野の研究動向】

修辞学

森 雄一

修辞学の分野では今期も比喩研究が盛んであった。そのなかでも新しい視点の研究として注目されるべきものに①岡本雅史「直喩標識としての「じゃないけど」—談話における直喩とアナロジーの再考に向けて—」(『日本認知言語学会論文集』20)がある。否定的直喩標識に着目することで、アナロジーの否定的側面をクローズアップし、それが日常会話のなかでどのように用いられているか観察している。談話において、否定的直喩標識と通常の直喩標識を重ねて用いることで段階的なフレーミングが行われている場合があることやヘッジ表現との連続性があること等興味深い指摘が多くなされ、今後の展開が期待される論となっている。②菊地礼「文法形式と比喩の関係—知覚動詞を用いた直喩について—」(『国立国語研究所論集』19)は、知覚動詞が直喩として用いられる条件について用例の丁寧な観察から導いている。中村明氏の研究以来、日本語の直喩標識の多様性は意識されてきたが、①②いずれも直喩標識においては周辺的と見られてきたものを扱った開拓的な研究となっており、隠喩の影に隠れがちな直喩研究がこのような形で展開するのは望ましいことである。夥しい蓄積がある隠喩論においても③谷口一美「身体部位詞の比喩的用法にみられる身体経験と仮想性」(『ことばから心へ 認知の深淵』開拓社)は今期の重要な成果である。身体経験をもとにしない「先生は頭から湯気を出していた」、「彼はいつも部長に尻尾を振っている」といった隠喩を扱い、前者は「キャリアオーバー」(ターゲット中に存在しない、あるいは顕著でないベース中の要素をターゲットに移す)から、後者は2つの入力スペースの融合という観点からそれぞれ論じている。アナロジーの「準抽象化理論」を提示した名著④鈴木宏昭『類似と思考 改訂版』(ちくま学芸文庫)が初版から大幅な改稿を経て出版されたのは大きな出来事であった。アナロジーをベースとターゲットとその2つを包摂するカテゴリー(抽象化)の3項構造でとらえ、その抽象化は、一般化された目標の達成に向けたものになっている等の制約がかかっているゆえに「準抽象化」であるとす。稿者なりの理解であるが、諺の持つ力が「準抽象化」の特質と重なりあうという観点(p.221)は極めて興味深いものであった。諺は表現学においても重要なトピックであるが、同書の延長線上に考えていくアプローチもあってよいと思われる。また、博士論文が書籍の形で出版されたものに⑤伊藤薫『修辞と文脈 レトリック理解のメカニズム』(京都大学学術出版会)があった。書名に見られるように文脈論から修辞現象をとらえる観点を提示し、山梨正明氏の修辞論を受け継いでいる。比喩以外の修辞現象を扱った好論として⑥水藤新子「めくるめく「雪国」変奏 文体はいかに模写されたか」(『ユリイカ』52-1)が特筆される。和田誠の「雪国」模写を題材に、多くの書き手の文体特質をジャンル、視点人物、レトリックの3つの観点からとらえ、模写(モジリ)論の今後の基本文献になるとともに、文体とはどのようなものかという大きなテーマにも示唆を与えてくれている。(成蹊大学)